

物語の祖

源氏物語総合の巻の「物語のいできはじめのおやなる竹取の翁」という文句は、かるがるしく見過ごせない言葉である。物語という言葉は万葉集にも一つ見えているが大体平安時代になつて盛んに使われた言葉である。平安時代の物語という言葉は、今言う小説というのと大方ひとしいと考へてよからう。竹取物語、宇津保物語、落窪物語、伊勢物語などそれである。小説という漢語も勿論すであつたものではあるが、かの国においてもわが国でも、現在われわれの使う小説の意味には全く使つていない。

ここにいう「竹取の翁」というのは、いまわれわれの見る竹取物語をさしているということについてはほとんど異論のないところである。そして今見る竹取物語は、小説としてよく整いまとまつている非常に完備したものといつてよからうと思う。このように完備した物語が、「物語のいできはじめの祖」であるということについては、疑念なきを得

清 水 泰

ないのである。これはすでに言われてもいることであるが、現存の竹取物語というのは、その前に古本の竹取物語というようなものがあつたのであろう。或はこれは漢字のみで書かれた竹取翁伝というものであつたのかも知れない。そのようなものをもとにして、仮名が發明され自由に表記することが出来るようになった時代に、書かれたものが、今見る竹取物語であろう。また竹取物語というのは、物語という語も流通し成語になつていた時代に出来たものと考えられる。それだからこそ「物語のいできはじめの祖」と竹取物語をさして、源氏物語の作者はいつたものと思われ

る。それなら竹取以前の物語はなかつたのか、即ち物語以前の物語はなかつたか。これに対しては否をいわざるを得ない。以下そのことについて述べてみる。

ことわつておくが、口承文芸ということがよく言われる、

記録する術のなかつた時代の口承文芸もあり、また近代にいたつても記録されずに口承されたものもあつて、それらをこめて口承文芸と言うようである。しかしわたくしは口承文芸については言わない。すべて記録されたものに限定しようと思う。

言うまでもなく漢字の伝来は応神天皇の時と正史に見えている。けれども大陸との交通やその他を考え、非公式にはそれよりもやや以前から漢字は伝わつていたと見ねばなるまい。当時の先進国である大陸の方から文字は伝わつたのである。そしてそれらを伝えた外国の学者を師として、わが国人も習つたのであろう。また帰化人がながく文筆の史となつていたこともあきらかなことである。

かくてかの国の書物を理解出来るようになったわが上代人は、やがて自国のことをも書き、思想感情を表明する事が出来るようになった。けれども漢字による表出には相当困難な点もあつたであらう。いまわが国最古のものとしては古事記、日本書紀、風土記などが知られている。これらはみな漢文で書いてあると言つてよいであらう。万葉集はわが国独特の和歌をあつめたものである。したがつて漢字をば使つているが漢文とは言えない。漢字の音や訓を使いその他色々の用字法があることは周知の通りで、所謂万葉仮名で書いたものである。このように上代に記録されたもの

のを見ると漢文か、それでなければ万葉仮名を用いた和歌のようなものか、或は和臭を帯びた漢文と見るべきものである。和歌は純芸術作品としてわれ／＼の祖先は非常に重視していたことは改めて言うまでもない。

以上のような理由で上代人の書いたものは、国史か、国史に関係あるもの、または和歌の記録である。けれどもいまいう小説のようなものを全く書かなかつたかと言つと、そうではない。漢文で書いたもので、その量も長くはないが、その名をとどめているものもあり、全文を伝えているものもないではない。

柘枝伝と言うのはその一つである。これは万葉集巻三に仙柘枝の歌三首と言う題があつて、三八五の歌の左注に、「吉野の人味稲の柘枝仙媛に与へし歌なり」と。但柘枝伝を見るに、この歌あることなし」とあるから万葉集成立の時には柘枝伝と言うものがあつたことは明かである。懐風藻にも数首味稲に関する詩があり、また続日本後紀にもそれに関する記述があるから、柘枝伝は現在伝わらないがその大要を右の書を綜合して考えることが出来る。すなわち、味稲と言う漁夫があつて、吉野川にヤナをかけたところが柘枝（ヤマグワのエダ）がかかり、それが美女に化して味稲と相婚う仲になつたが、後美女は味稲を責めてひれ衣をつけて天に飛び去つた。と言うのである。この綜合した柘

枝伝の内容（不完全であるはまぬがれないが）から考えてみても相当支那思想をうけたものとはいえようが、当時としてはまとまつた一つの物語とすることが出来るのである。

次は浦島子伝である。浦島の話は、丹後風土記、万葉集、日本書紀その他にも見えている。丹後風土記は今伝わらないが、釈日本紀に引用されたところによつて知ることが出来る。それによつてみると丹後風土記には浦島の話の梗概を述べ、伊与部馬養が述べているところと同じであるといつてゐる。馬養というのは、かつて丹後国の役人であつたので浦島の話をかき、後、大宝律令の撰定にも従つた当代の学者で懷風藻にも出てゐる人である。これによつて考えると伊与部馬養が漢文で浦島の伝を書いたもののように思われる。現在われ／＼の見る浦島子伝は、平安初期に書かれたものと思われ、伊与部馬養の書いたものとはほぼ同一内容のものと思われ、伊与部馬養の書いたものとはほぼ同一内容のものと思われ。そしていま見る浦島子伝は、近世になつて木下順庵が補訂したもので、それまでに伝写の誤などもあり、「紀五言絶句二首和歌」というのも浦島子伝にあつたのであろう。また延喜二十年の作である続浦島子伝記というものも、浦島子伝にくらべると遙かに詳細を極めたものである。ともかく浦島子伝も続浦島子伝記ともに漢文で書いたものである。「紀五言絶句二首和歌」というのを馬養の書いたものにあるとみる学者もある。いづれに

せよ馬養の書いた浦島の話も漢文で書いたもので、その題名は浦島子伝であつたかに思われる。この浦島の話も一つの物語といふべきものであろう。

次に白箸翁伝というのが伝つてゐることもいっておこう。これは群書類従に収めてあつて貞観の頃紀長谷雄の作であるから時代は平安に在るが短かい怪異物語であることである。

ここでひるがえつて古代の支那小説を一瞥してみよう。もと／＼漢字は支那のものであり、当時の文化も彼は我にくらべて大にまさり、所謂先進国である。すべてにおいて範を彼にもとめ、それを模倣しようとしたことは明らかである。この書に収めてゐるところの小説はみなで九十八篇である。その篇名は記、紀、伝、詩、志などであつて、記といふもの十二篇、紀は一篇、その名は周秦行紀とあるが、その内容をみるに記でもさしつかえないものと思われ。伝と名ずけるものは実に三十三篇をしめ、圧倒的多数である。この三十三篇には鶯々伝も数えた。鶯々伝は一に会真記ともよばれてゐる。鶯々伝として数えて会真記の方はとらなかつた。次に志となつてゐるものが二篇ある。寃憤志と靈鬼志である。詩とあるはただ一篇、本事詩があるばかりである。伝と名ずけたものは非常に多いのであつて、漢

武帝内伝、飛燕外伝、梅妃伝、長恨歌伝、紅線伝、劉無雙伝、謝小娥伝、霍小玉伝、李娃伝、鶯々伝、楊媚伝、杜子春伝、非烟伝、神女伝、妙女伝、奇鬼伝、龍女伝、人虎伝、白猿伝、任氏伝……である。伝というのは語りつき聞きつたえて評判し説明する意味である。人一代の事蹟を書きしるして後世に伝える一代記の意味ではない。中国においても伝を今の小説の意味に用い、物語的のもの短篇小説的のものを伝といつている例は多いのである。

右の晋唐小説などによつて察すると、わが国で仮名の發明がなく、物語という語が出来ない前には主として伝と名づけて漢文の体をもつた短い文章で物語を書いたと考えられる。伝が物語以前の物語であつたと言えるように思う。しかし支那においても伝以外に記と志としその他の語をもつている。わが国でも伝以外の語があつた筈である。はたして延暦十六年十二月に弘法大師が書いた聲替指帰の序文をみると日雄人という者が睡覺記というを書いていることがわかる。

睡覺記は今失われているので、その内容を十分に知ることは出来ない。ただ弘法大師の文によつて窺知するより仕方がない。その一部分をあげると、

勝弁巧發詭言雲敷。遙聞彼名尸居之士拍掌大笑、僅對其字嚙啞之人張口拳声

右によると、日雄人は優れた弁舌を巧みに發して詭弁縦横人のあぎとをとくものがあつた。其の作者は日雄人と聞いて、まじめの神様代理のかたしるのような人も、掌をうつて大笑し、本を聞いて僅かにその字にむこうと、物いわぬ啞も口を張つて大声をあげるといふものであつたというので、恐らく睡覺記は余ほどの滑稽小説と考えられる。また書名からも垂氣ざましになるようなことを記したものであらうと思う。

また松浦佐用姫の話もあつたかも知れぬ。その他伝奇的のものも、あつたであらう。そして櫻児の話や、葦屋処女の話や、真間の娘子の話のようなものは必ず物語の形をとつて記録されたものがあつたと見たいものである。

上に記したところはなお小説の要あるところもあるが、いまはこれにとどめておく。

一 物語文学史論(三谷 栄一著)。物語について(立命館文学

一二五号 清水 泰)

二 平安朝文学史上巻、一五九頁以、(五十嵐 力著)